

《四番目の東方の博士》

まずカトリック信者としての常識を少し申し上げたいと思います。イエス様がお生まれになったのは12月25日ですね。そして今日は何の日ですか？ “主の公現”の日ですね。はっきり申し上げてイエス様の実際の誕生日はわかりません。4世紀に西方教会(ローマ教会)がイエス様の誕生日を12月25日と決めたのです。それには理由がありました。当時は、古代ローマやギリシャ文化圏では太陽神を拝んでいました。その太陽神の誕生日が12月25日でした。そして、ローマの皇帝コンスタンチヌス(Constantinus)がカトリックを国教として受け入れた313年から色々なカトリック教会の教理を定め始めました。その中でイエス様の誕生日を決めて祝わなくてはならないという文化的な感情がありました。それで民がイエス様を神様として受け入れ易くするために、民が信じていた太陽神の誕生日をイエス様の誕生日としたのです。

一方、東方教会(ローマ教会から東の方の教会)では古代エジプトから信じられている太陽神の誕生日が1月6日だったので、その日をイエス様の誕生日としました。西方教会はこの東方教会が祝っていた日を受け入れて、この日をイエス様の誕生を公に知らせる日 “主の公現の日” としたのです。このように12月25日というのは歴史的な理由があります。

それではクリスマス・イブというのは何でしょう？ 私たちの誕生日にはイブはありませんよね。これは、ユダヤでは日を計算する方法が今と違いました。一日は夕方(日没)から始まるのです。ですから私達の24日の真夜中は、ユダヤの人達には25日になるのです。そのことを理解するために25日の夜をイブという表現にしたのです。これも常識として覚えておいて下さい。

今日の福音でイエス様を拝みに来たのは三人でした。彼らの名前は伝承によりますと “メルキセデク、バルタサル、ガスバル” だそうです。この三人を何と呼んでいますか？ “占星術の学者” ですね。しかし、昔から伝統的には “東方の博士” とか “東方の王” と呼んでいます。昔は、王や博士になるためには何より基本的に星を観る能力が必要でした。高い地位の人は星が読む勉強をしたそうです。とにかく三人が拝みにきたことはよく知っていますね。彼らが新しい王であるイエス様にお祝いの品として捧げたのは、黄金、乳香、没薬(もつやく)でした。

ところで皆様は、イエス様を拝みに来るはずだった博士がもう一人いた、という話をご存じですか？ ヘンリ・ベン・タイクという牧師さんが書いた『四番目の東方の博士』という本があります。読んだことありますか？ それにはおもしろい物語が紹介されています。

もう一人の博士の名はアルタバンといいいます。彼もメシア(救い主)の誕生を知らせる星を見つけたので、三人と一緒にイエス様を拝みに行こうと約束しました。ところで、自分の財産を売ってサファイア、ルビー、真珠を買い、待ち合わせの場所に行こうとした時、道に血を流しながら倒れている人を見ました。彼は躊躇せずその人を自分の乗ってきた馬に乗せ、旅館に連れて行き、そこの主人にルビーを渡して「この人を看病して下さい。私は約束があるのですぐに行かなければなりません」と言って約束の場所に向かいました。しかし間に合いませんでした。それで、彼は一人でベツレヘムに行くことにし、新しい王が生まれたというある旅館の馬小屋まで辿り着きました。しかし、そこには誰もいませんでした。ただ、一枚の紙だけ彼を待っていました。三人の博士が残したメモでした。「私達は新しい王を拝みました。先に失礼します。新しい王を拝んで帰って下さい」と書いてありました。

しかし、そこに新しい王はいませんでした。生まれた赤ちゃんは両親に連れられて、エジプトに行ったという噂を聴き、アルタバンは自分もエジプトに行こうと思いました。その時でした。彼の背後から馬の蹄(ひづめ)の音がして、女の人達の悲鳴と赤ちゃん達の泣き声が聞こえてきました。振り返

って見るとたくさんの兵士たちが赤ちゃんを殺していました。ヘロデ王が“新しい王”の誕生を恐れて、ベツレヘム中の男の赤ちゃんを殺すように命令したためでした。ある家でお母さんが抱きしめている赤ちゃんを兵士が殺そうとしているのが見えました。アルタバンは、兵士の隊長にサファイアを渡して「その赤ちゃんを殺さないで下さい」と頼み、赤ちゃんを救いました。彼が準備した宝物は真珠だけになりました。

それから彼はイエス様に会うためにエジプトに向かいました。やっと彼がエジプトに着いた時、そこにはイエス様はいらっしゃいませんでした。それからアルタバンは諦めずイエス様を捜して旅をしました。しかし会うことができず、いつの間にか30年の月日が経っていました。彼は70歳になっていました。

彼はもうイエス様に会うことはできないと思い、それなら最後に聖地巡礼をしようとエルサレムに行きました。彼がそこに着いた時、大変な騒ぎが起こっていました。「自分は救い主だ」と叫ぶ者が、今日十字架で処刑されるということです。それを聞いたアルタバンは、その人こそ自分が会いたいと思い捜していたメシアではないかと思いました。そしてその人に会うためにゴルゴタの丘を登って行きました。その時、奴隷として売られていく女の子を見ました。その子は悲しい目で「助けて下さい」と叫んでいました。アルタバンは迷うことなく、残っていた真珠を身代金として渡してその女の子を解放してやりました。

ちょうどその時地震が起こりました。聖書にイエス様が亡くなられた時“大地が震えた”(マタイ27・52)とありますね。建物が揺れ、アルタバンの上に屋根の瓦が落ちてきて、死に至る状況に陥ります。アルタバンは死ぬ寸前に神様に「申し訳ありませんでした。あなたが送って下さった新しい王に会おうと一生を捧げましたが、会えませんでした。今、もう少しでその方に会えるところなのですが、会えずに死んで行きます」と祈りました。すると「悲しむことはない。あなたは私の立派な息子だ。あなたは既に私に三回会って私の子を拜んだ。あなたが助けたあの三人は、私が送った新しい王だ。心配しないで私のところに来なさい。あなたは三回会っているのだから」という声が聞こえました。

こういう話です。アルタバンはみんなに知られていませんでした。でも三回自分の持っている物を捧げてイエス様に会ったのです。この話は信じてもいいし、昔から言い伝えられてきたただの作り話かもしれませんが。

しかし、この物語を通してひとつ教えられることがあると思います。私達の信仰の道はイエス様に出会おうとがんばる道だということです。そして、どのようにしたらその道を探せるのか、イエス様と具体的な感覚を通して会えるのかを考えさせてくれます。私達がどのような心を持っているかによって決まるのだということです。アルタバンという博士は現実にはイエス様には会えませんでした。会おうという気持ちを一回もあきらめなかったんです。一生その気持ちを持ってがんばったことで神様から認められたのです。

ですから、私達も会おうという心があれば、ご聖体を通してイエス様に会えます。貧しい人や悲しんでいる人を通して、又今自分が嫌っている人の顔の中でイエス様に会えます。

今日の公現の祝日に考えることは、私達が神様に何を捧げて生きているのかということ。形式的なことではなくて、本当に会おうという心を持っているのかどうかを考えてみましょう。アルタバンのような気持ちを少しでも持てる様にイエス様に願いましょう。

ありがとうございました。